# 西遊よれよれ日記　ストックホルム篇

”この辺りは一人です。あとスコットランドで娘と合流、またそのあとロンドンで妻と合流の予定です”

７月１１日（金）; 続き

ホテルは高いだけあってこぎれいで風呂も良い。だがケルンのほうがもっと良い。もう２０時なのに外は４時くらいの感じで、それがもう４時間くらい続いている。さて１ＳＥＫ（スウェーデン・クローネ）は１５円くらいだろうか。円をマルクに換算し、マルクをクローネに換算しているから＜誤差が太い＞かもしれない。

ここで初っ端から失敗。避難路を確認しようとして自分を締め出してしまった。フロントからべつの電子キーをもらって部屋に入る。元のキーはフロントの操作で使えないようになっている。下着姿でなくてよかった、とはいえ革靴にアシックスのショートパンツは様にならない。

７月１２日（土）

４時頃目をさます。靴下をのぞいて洗濯物は乾いている。もういっかい寝る。＊＊田さんに会いに行った。最初はまともだったのに、だんだんと実はぼけていることがわかり（際限なくお菓子を喰うのである）涙が出てくる。どうしてこんな夢をみるのだろう。＊＊田さんと父親を同一化しているのか。６時には太陽が低く出ている。

９時半、ホテルを出てすぐ目の前の中央駅へ行く。１３、１４、１５の三泊四日のホテルの予約をせねばならぬ。インフォメーションの受付氏はコンピューターで打ち出したリストの、最初のを薦めるとはっきり言う。一泊５４５ＳＥＫ（シャワー、朝食付）まあ８千円というところか。ＯＫと答えると、君は二泊分を払えばいいんだぞという。夏の割引料金だそうだ。そんな制度のことを読んだことはあるが本当のことだったのか、ワオ。だが、もともと５千円くらいのホテルなのかもしれない、と例の懐疑主義が起る、明日の天気は吉か？

駅とホテルのあいだの通りを東へ進む。わけのわからんポールのたったセンゲル広場を過ぎ、王立公園に至る。ここは屋台だらけで王立にふさわしからぬ景観を呈している。屋台をぬって南下し橋上から国会の写真などをとり、ガムラ・スタンへ渡る。この小さな島は、王宮と細い路地毎に並んだ商店と小さな広場からなっている。衛兵の交代の写真をとる。

王宮の地下博物館の受け付けでは、アメリカ人二人、香港か台湾の一家四人が８０ＳＥＫの入場料でぐずぐずしている。いらいらしている受付けのおばはんは、私の顔をみるやにこやかにプリーズという。こちらもにこやかにかつ＜即座に＞１００ＳＥＫをだしてチケット・プレーズという。王冠や錫杖や剣などの展示、巨大な銀の洗礼盤など見事なものである。この８０ＳＥＫは王宮の全域の入場料でもあった、正解である。王の居室などを見て回る。内部に教会があり、そこの女の子に、あれはパイプ・オルガンですね、活きているのですかとたずねると、電子機器を示していつもはこれを使っていますとのこと。またある部屋の一角に、天井にまで届く５０ＣＭ直径の筒状の物体を発見、この筒は２０ＣＭ平方のタイルでおおわれ、下に鉄の扉が付いている。ストーブであることは想像がつくが煙の排出口がどうなっているのか。広間の控えのところにもう一基を発見し、かなたを見やると警備の女性二人（要所には衛兵が配備され、残りは制服の女性）が近づいてくるのに、「コレハナンデスカ … 」とカマトト質問をするが、煙の行方はわからない。　王宮の外に出る。王宮そのものは写真に取るほどではなく、向かいの教会の塔を写真にとろうと数歩後ろに下がった、そのとき『ハールト』とかなんとか怒鳴られ、振り返ると衛兵が私に合図している。数機ならんだ礼砲に近づきすぎたらしい。

ガムラスタンの小さな広場の屋台でビール（３８ＳＥＫ）を飲む。ドイツに比べると高い。税を高くして禁酒させたいのだそうだ、税を高くして税をとりたい日本とはえらい違いだが、（高くても飲むことにおいて）結果は同じであろう。ビールのうまさと、売り子の愛想の良さに値段の高さを忘れる。と、そこに現れたるは、ガイドに引き連れられた農協色の服を着たおばはん、おっさんの一団。農協でも何でもいいが、その服は何とかならんものか、日本の観光地そのままのかっこである。三十六計逃げるにしかず。石畳の路地を抜けると船着き場があり、明日行く予定のユールゴーデン島への船が待っている。今日も明日もあるものか、船にとび乗る。

島にはスカンセンという遊園地と民家博物館、要するに江戸村の巨大なやつである。でもこれもなかなか本格的なもので、中で民族衣装の女の子や男の子が火を焚いたり作業をしたりしている。しゃしんをとる。総じて窓が小さく、入り口も小さい。私でさえかがまないと入ることができないほど小さいのがある。その中の若い大女に、「コレハ白雪姫ノ家カ？入リ口ガ小サスギル」と言うと、くすりと笑い「ハイ、小サイデスネ」と答える。もう少し受けを期待していたのだが。またべつの家で、王宮のストーヴの 1/5 くらいのを発見、石炭ではなく薪を使うのだと女の子が教えてくれる。

ユールゴーデン島は実は橋でストックホルムとつながっているのを地図で発見、歩いて帰ることにする。確認のために若い男女をつかまえると、ちょっと遠すぎる、あの道路をバスが走っているから乗れと言う。軟弱なスエーデンっ児よ、たった４キロだぜ。　ヨットやボートを眺め、デパートに入ったりしながらホテルに帰る。スエーデン人の 4/5 が英語を解するとガイド本にあったが、本当かもしれない。

７月１３日（日）

日曜はホテルのチェックアウトが１２時なので、朝食を多めに食べ（今日からのホテルが心配なのだ、貧乏症である）１１時近くまでぐずぐずする。次のホテルは同じヴァーサガタン通りを北上して３８番地、３０から４０をうろうろするが見つからない。食堂の張り出しにいた若いのに、せんとらるほてるハイズコヤと聞くと、これだと指したのは隣。この張り出しの陰に地味な看板が隠れているのだ。古い大きな建物の前面はこの食堂をはじめとした店が入っていて、その一角にホテルの入り口があるのである。まあこんなものかと入っていくと、この一角は張りぼてで中庭にホテルがあるのだ。新築ではないが、かなり新しい建物。フロント嬢もメリハリがきいてて好感が持てる。挨拶をして紹介状を渡しながら、コノ０ハ本当デスカと、1 night 545x2, 1 night 0 の０を示しながら確認する。もちろんと彼女は答える。何という幸せ、前のホテルの一泊分で三泊できるのである。部屋は前の半分のスペースだが、ドアより入って右手 1/4 がトイレとシャワーで、シャワーは部屋のド真ん中に丸い筒として存在するという面白い造りである。

前日ユールゴーデン島に行ったのだが、見落としていた博物館があった。ヴァーサ号という古い巨大な帆船で、設計ミスか何かで作ってすぐに沈んだのがあり、この船をナショナル・プロジェクトとして引き上げたのが展示されているのである。もちろん歩いていく。写真をとる。

何故かスウェーデンにはピッツァ屋がやたらとある。パスタがあるのではないかと一軒に入ってみたがない（どうも、スウェーデンのイタ飯屋はイタリヤから上陸したのではなく、アメリカ経由らしい）。しょうがないのでビーフに何とかとなんとかというのを注文したが、繊細さとは完全に無関係な代物で、ピッツァとイタリヤ語で呼びたくない。外国のトンデモ鮨屋の鮨である。小にしてよかった、隣の女性は巨大なピッツァ（と称するもの）にかぶりついている。帰路、ホテルの隣のステーキ屋で口直しにビールを飲む。２８ｓｅｋと安く、最初からここにするのだった。道に張り出したテーブルで、ここ数年の禁を破ってシガリロを吸う。一服するや

効いた、嗅覚から目にきたらしい。いいかげんな焦点で平板に見えていた風景がピンと焦点があい、向こうからくる人、人、人が全部立体的に十段重ねに見える。禁煙しててよかった。この箱が終ったらまた止めよう。煙草はヤクである。常用するものではない。酒は内臓から聴覚にきてすべてを混沌に落とす、煙草は逆だ。不思議である。

７月１４日（月）

この１０日間緊張の連続であった。少しテンションを落としてゆったりすごすことにしよう。１６日からのロンドンに備えねばならぬ。

このホテルの１、２階は吹き抜けになっていてその２階が朝食の部屋になっている。ハムがうまい、ソーセージは、ドイツかな。ミルクが少し濃いかなとおもいながら無造作に飲んでしまった。少しおなかにきたので部屋で寝転がってすごす。

無計画にどっかの公園にぶつかることを期待して歩く。うまい具合に小高い小さな丘に登る。そこには、「考える人」ならぬ「考え込む青年」みたいな像がある。温度はさほどではないが日差し（紫外線）がきついので、つい北向きのベンチに座ったのが間違いであった。スウェーデンの女性は太陽に向かうと大股を広げたくなるものらしい。やって来たショート・パンツのおばさんは、やおら南向きのベンチに片足をのせおっぴろげで新聞を読みだすのである。公害だ。それから若い男女がやって来て、芝生に寝っころがるのだが、やわらかい素材のミニワンピースの女性のほうが布をよせてまえだけ被うと立てひざで北枕となるのである。こっちは公害、じゃないが目のやり場に困り空をみることになった。あっちこっちでこれだ。それでも負けずに（何に？）日向ぼっこをし、鳥の声をききながら１時間ほどすごす。

デパートでレポート用紙を買うが高い（あー高）。ホテルのロビーで線型代数の問題をかんがえながら午後をつぶした。夕食は隣のステーキ屋、ここのボーイ（ホテルの場所を最初にたずねた青年）は有能でにこやかに客をこなす。隣のテーブルの犬君に、君ノ写真ヲトルコトヲ許可スルカと言うと、尻尾を振るので写真をとる。

７月１５日（火）

ストックホルムの西の島の東端に、市庁舎（そこでノーベル賞の授与式が行われる）があり、その塔に登る。ここで初めてブスでない（が必ずしも美人というわけでもない）東洋人に出あう。日本語をしゃべっている。あと二組日本人をみかける。もちろん台湾、コリアンも多い。庭で白いカッターに真紅の！チョッキの台湾人のおっさんが二人写真をとっている。とってやろうかと言うと手振りで頼むという。英語をしゃべらないから香港人ではない。

この島の中心まですたすたと歩いていくと格子窓の大きな建物があり、アラブ系の女性がたむろしている。また＜１マルクくれ＞かと緊張するがそれではなかった。地図で調べると警察である、では彼女らは何をしているのか。警察の西が小山になっている、クロノベリース・パルケンかなと地図を広げていると小山から降りてきたおばあさんが英語でどこへ行くつもりかという。「 Nowhere, I’m just walking. ベツニ、タダ歩イテオルダケデス。」「何処から来たのか？。」「日本カラ。」「そりゃ、遠くから来たものだ、ストックホルムは好きか？。」好きかと言われたら「好キデス、良イ街デス」と言わざるをえまい。ビールが高いなどと文句は言えない。「私ハ何処ニイルノカ？」とカマトト質問をすると「クロネンベルグス・パルケン」とドイツ語風に答えてくれる。「パルケン？、小サナ山ニ見エマス。」と言うと「ビューティフル・トゥリーズがあって、空気が新鮮だからぜひ公園に行きなさい。」との仰せである。「アリガトウ。」「ストックホルムを愉しみなさい。」と別れる。

どれがきれいな樹（ビューティフル・トゥリーズ）かさっぱりわからないが、木漏れ日と雀、ハト、きれいな鳴き声の見知らぬ鳥などを楽しみながら南周りをさけ公園に登る。町中でないので人も多くなく、おっぴろげも目立たない。この数日日向は汗がでるくらいだが、日陰は涼しいので小一時間日陰のベンチですごす。ビールが欲しい。だが行けども行けどもストックホルムはピッツァ屋ばっかり。わざわざレストランに入って高いビールを飲むのもいやなので、ホテルの隣の例のステーキ屋まで我慢する。

ロンドンの予習が大変だ。フランクフルトの二の舞を演じないために、今朝は空港行きのバス停車場と時刻の確認をしてきた。だがどじをやるのだ、私は。

７月１６比（水）

アーランド空港の特別待合い室（ビジネスクラス！）で朝日、日経、週刊朝日を読む。酒鬼薔薇君の他人にたいする非対称の感覚が気になっていた、歯が折れるほど人を殴れば、同じことを人からされることを許容しなければならない。宗教を作ることで非対称を作りだしているのだろうか。

機内ランチはまたしても鱈、スカンジナヴィアには乗りたくない。ヒースロー着陸時に耳が痛む、イタイ、イタイ。